悠久の名作シリーズ（22）

『春　夜』　蘇　東坡（蘇軾）

春の夜の静かに美しくただようムード

春　夜　蘇東坡

春宵一刻直千金　　春　夜　蘇　東坡（蘇軾）

花有清香月有陰　　春宵一刻　直千金

歌管樓臺聲細細　　花に清香有り　月に陰有り

鞦韆院落夜沈沈　　歌管　楼台　声　細細

鞦韆　院落　夜　沈沈

「宵一刻直千金」

蘇軾の号は東坡、父は洵、弟は轍といい、それぞれ唐宋八大家のひとりとして有名です。蘇軾は有能な官吏として活躍し、その反対派に陥れられて、しばしば地方官に左遷されるなどした。また、学者としては歐陽修の門下として名を馳せ、歴史的立場から古典を批評する優れた業績を残した。当時は、この蘇軾父子をはじめ、王安石・歐陽修・司馬光・程伊川などという逸材が多く輩出した一時期であり、学問と歴史の上で一つの新しい境地を現出した。こうした代表的人物たちは、いずれも能吏であり碩学であり、文豪であって、いろいろな面に才能を示し、しかも各人それぞれ特徴のある個性の持ち主であったが、その底には共通した考え方や感じ方が流れている。それは、人間の存在、或いは心の活動というものを宇宙の中の一存在として客観的に見ようとしたことにある。そこから生まれてくる彼らの人生哲学は、他の時代の人たちと比べ、哲学的であり、思想的であり、深みがあるように感じられる。そして、その生活感情はのびのびしたところがあり、文人気質を表わしており、蘇軾はそういった面で代表的ではないだろうか。過ぎてゆく春の一刻一刻を千金の値があるものとして味わっている作者は、人はただ「春宵は良いものだなぁ」と言っているだけではなく、今過ぎてゆく一刻一刻にこそ人生を充実させる全てがあると言っているのであろう。

その全てとは何か、それは花であり、花の清香であり、それらを照らす月影であり、その光を映す葉であり、庭を照らす月であり、なめまかしい空気であろうか。人間のあらゆる営みが、この一刻に比べて如何ほどの価値があろうか。

楼台の歌も管弦も、院落に立てば遠くから聞こえてくる。それは管弦の場所にあって聴き、あるいは自ら歌い弾ずるよりは趣があると思える。離れて聞こえてくることが、し

みじみと趣が味わえるものである。
　庭の鞦韆は、乗る乙女もなく垂れさがっている。それは動かないまま、春の夜は更けてゆく。蘇軾の詩は、爽やかで飄逸で行雲流水のごとく自然で企みがないといわれる。

【語句の意味】

春宵＝春の夜。
一刻＝「刻」は時間の単位で一昼夜の百分の一。ここではごくわずかの時間。
直　＝値に同じ　値うちがある。
千金＝漢代に黄金一斤を一金といったここでは非常に価値が高いこと。
有陰＝「陰」はくもることで。おぼろにかすむ。一説に陰を曇りとし「月に曇りがある」とする。
　また「陰」を光とし明るく照らす意とする。
歌管＝「管」は竹で作った楽器。ひろく楽器・音楽を意味し歌と音楽歌とお囃子。
楼台＝高殿。
寂寂＝ひっそりと静まりかえったようす。
鞦韆＝ぶらんこ。当時の宮女の遊戯。
院落＝屋敷の中庭。垣根で囲まれた屋敷。
沈沈＝夜のしんしんと更けていくさまひっそりと静まりかえったさま。

【詩の意味】

　春の夜は、なんともいえず、すばらしく千金にも値するほどのねうちがある。花は清らかな香りをただよわせ、月もおぼろにかすんでその風情は筆舌につくしがたい。
　（先ほどまで）高殿から聞こえていた歌や音楽も（いつのまにか）ひっそりと静まり、ぶらんこのある中庭に、春の夜はしんしんとふけていくことである。

【鑑　賞】

　起句で主題を述べて、承句でその訳として、花と月の趣の深さを表現し、転句と結句では対句の構成をとりながら、春の夜の現実の情景を描いている。先ほどまでにぎやかだった楼台や院落、その印象があって現前の静寂がいっそう深められ花の香りと月の光が強く浮かびあがってくる。

【参　考】

　起句の「春宵一刻直千金」は、人々にはあまりにも有名な句である。その理由になる情景を説明的に描写すると、春の夜の静寂を描いたとはいえ、季節は春、そこにおのずと華やかさがあるといえる。そういったことを含んだ静けさであり、花香・月影。歌管など、この語の持つ雰囲気は、いってみれば寂寞とは少し異なり、艶なる静けさで、そこに千金の値を見出し得ているのである。

この起句をふまえた川柳に

「夏の月（夜）蚊を疵にして　五百両」

室井基角（江戸時代）

夏の夜の月見も、春宵におとらず、すてきなもので捨てがたい味わいがあるが、しかし蚊にくわれるのはなんとも興ざめで、月見の気分をこわしてしまう。春宵は一刻千金といわれているから、値ぶみするなら、その次点で価値は半減し、一刻五百両というところか。

「一刻を　千金づつにしめあげて
六百両の　春のあけぼの」
蜀山人（大田南畝）

一刻は千金ということだから、これを基準に計算すると、春のあけぼのまでには、六百両もの値がつくことだ。

また、土岐善磨の「鶯の卵」にも次の訳詩があり、「ひととき惜しき春の宵や　月に陰あり香るは花　たかどのかすかにもる歌笛　ぶらんこ垂れて夜はふけたり」と、この詩の起句「春宵一刻直千金」は庶民の間にも広く知られて多く引用れている。

また、春夜叙景の詩として、この詩と双璧をなすといわれるものに、王安石の「夜直」があり、この詩を紹介する。

「夜　直」　王安石

金爐香盡漏聲殘　金爐香尽きて　漏声残る
翦翦輕風陣陣寒　翦翦たる軽風陣陣として寒し
春色惱人眠不得　春色人を悩まして眠り得ず
月移花影上欄干　月移って花影　欄干に上る

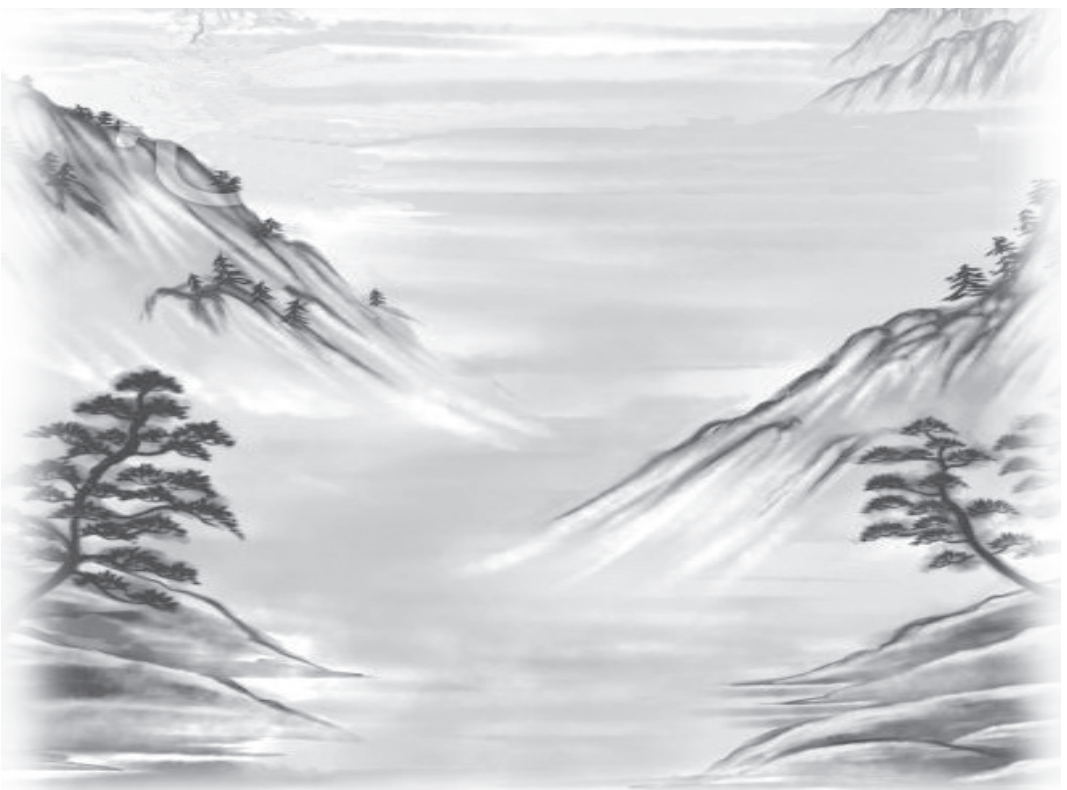
【詩の意味】

春夜、宮中に宿直して夜も更けると、黄金製の香炉香はなくなり、水時計の音も弱くなり、肌寒い夜風が時おり吹き入ってくる。

春の夜の風情は、私を悩ませ、なかなか寝つかれない。月が西の空に移ってゆくと、それにつれて花の影が欄干の上に表れてきた。

【参　考】

この詩は、王安石が春夜、宮中に宿直して、その夜景と心境を詠んだもの。

王安石（一〇二一～一〇八六）は、宋の政治家。字は介甫、号を半山。幼少より読書を好みひとたび目を通せば終身忘れなかったといわれ、文章を書けば、運筆は飛

ぶがごとくで、でき上がった文章に人々は感服したという。彼の友人の曾鞏が欧陽修に示したところ激賞してから、王安石の名が知られるようになった。宋の神宗の時、宰相として改革を行ったが、事ごとに旧来の意見と対する場合が多かった。六十九歳で没し、著書に「臨川先生文集」百巻がある。